Osaka University Knowledge Archive

Title	幸田露伴と北の海 : 実兄・郡司成忠の千島入植との関係を軸に
Author(s)	吉田, 大輔
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27383
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

幸田露伴と北の海―実兄・郡司成忠の千島入植との関係を軸に―

吉田大輔

はじめに

四方を海に囲まれた日本は、どのように諸外国に対処するのか。日本の海洋政策は、列強との地政学のなかでどのように展開されるべきなのか。いや、そもそも、海というものをどのように捉えたらよいのか。林子平（1738 - 1793）、高野長英（1804-1850）、佐久間象山（1811 - 1864）、吉田松陰（1830 - 1859）といった徳川期の思想家たちは、限られた情報からこの問題の重要性を先駆的に認識し、思考していた。また、間宮林蔵（1780-1844）のように、日本の北端がどのような地政学のもとにあるのかを、実際にその目で把握しようとした人物もいた。くだって、明治維新以降、日本は、島国である自国の姿により明確に直面し、さらに自覚的にこの問題を思考しなければならなくなった。そのような明治の時代に至って、文学の領域においても、「海洋」という問題系は、徐々に重要な意味を帯びることとなった（たとえば、幕末に出た最もはやい翻訳文学のひとつ、『ロビンソン・クルーソー』は、海洋地政学をめぐる暗喩―ロビンソン・クルーソーとしての日本―、の物語として捉えられていた[1]）。明治の新しい海洋文学の創造にことに熱心だったのは、幸田露伴（1867 - 1947）である。彼は、同時代の他の作家が海洋にさして関心を向けていない時期から、海洋を描くことの意義を自覚していた。このことは、明治文学研究の先駆者であり、晩年の露伴と直接の交流を持った柳田泉によって、はやくから指摘されていた。たとえば、次のような言及だ。

> 政治小説を別とせば、都会文学たる硯友社調全盛の明治文学では、海洋文学の面影は極めて少ない。その間に於いて、幸田露伴の存在は、独り嶄然として群を抜いている[2]

柳田は、露伴に言及することの多かった研究者だが、その際に、こうした海洋文学者としての露伴像を強調することが少なくなかった。しかしながら、今日に至るまでの露伴研究において、このような論点はいまだ十分に深められてきたとは言い難い[3]。そこで、本論では、今まであまり正面から取り上げられてこなかった、露伴の実兄・郡司成忠（1860-1924）の千島入植事業を露伴がどのように眺めていたか、という問題を素描し、その上で、露伴が文筆活動の上にこの事業

---

1 柳田泉『明治初期の翻訳文学』松柏館、1935、p. 8、ならびに、柳田泉『海洋文学と南進思想』ラジオ新書、1942、pp. 15−16

2 柳田泉「明治に於ける海洋文学」『柳田泉の文学遺産　第 1 巻』、2009、p.337、初出・『国文学　解釈と鑑賞』1943 年 6 月号。なお、これ以降の引用に際しては、一部、引用者の判断によって表記を改めた箇所もある。

3 個別の作品論として、たとえば平岡敏夫「殺戮する露伴　―長篇「いさなとり試論」『文學』43 巻 11 号、岩波、1975 などのように、「海洋」を重視する論考は存在するものの、さらなる研究の余地がいまだ残されている。

の影響がどのように直接的にあらわれているのかを考察したい。むろん、柳田も、この兄弟の関係には一定の注意を払っており、たとえば、上記の引用とはまた別の文章で、次のように触れている。

> 文壇で紅葉と相対峙する第一流の立派な作家として幸田露伴氏がひとり海洋文学の必要を唱えて、自らもそれに着眼をして書いていることは、先輩として尊敬に足ると思うのであります。幸田露伴氏は御承知のように報効義会（ほうこうぎかい）をやられました郡司成忠大尉の弟さんになるのであります（……）幸田露伴氏は海洋文学者として、特に海洋文学という風なものを重く見ておられた[4]

露伴は、上記のように海洋を描く文学を創造することに熱心だったが、彼自身が船に乗り外国を見聞したような体験はない（日本国内においての船上体験は多い）。では、どのような背景が露伴の関心を北の海へと誘ったのだろうか。その理由のひとつとして、郡司と露伴との関係を再検討する。さらに、露伴の海への志向は、郡司の事業に刺激され、南洋ではなく、北洋を向く傾向（北進論的傾向）があったと捉え、いままで断片的な言及に留まってきたこの問題を深める契機としてみたい。

1. 才子揃いの幸田家

露伴の家は幕臣で、代々、お坊主衆（江戸城に都城する大名の接待役）をつとめた家柄であった。露伴の兄弟・姉妹は、以下のように、各分野にわたって才能のある人たちで占められている。

長男、幸田成常（実業家、1858 - 1925）
次男、郡司成忠（海軍軍人、1860-1924）
三男、幸田露伴（文学者、1867 - 1947）
長女、幸田延（ピアニスト、1870-1946）
四男、幸田成友（歴史学者、1873 - 1954）
次女、幸田幸（ヴァイオリニスト、1878-1963）
五男、幸田修造（東京音楽学校在学中に夭折、1882-1907）

上記のうち、繰り返すが、本論でとくに重視したいのは、郡司成忠と幸田露伴のかかわりである（また部分的には成友にも触れたい）。兄弟のうち、成忠だけが幸田姓ではなく、郡司姓を名乗っているのは、幼いころに親戚の郡司家に養子にやられたためである。1872 年、郡司は、海軍軍人を志し、海軍兵学寮（のちの海軍兵学校、同期にやがて海軍大将となり 2・26 事件で暗殺

[4] 前掲柳田泉海洋文学と南進思想、pp.35-41

される斎藤実がいた）へ入学する。この兵学寮を卒業するころにはすでに千島への情熱をもっていたというエピソードが複数の郡司の評伝に確認できる[5]。

幼いころに別れたとはいえ、郡司成忠と幸田露伴、成友は、幸田成友の回想「凡人の半生」などによれば、兄弟仲が非常によかったようで、露伴や成友が一人前になるまでは、すでに海軍中尉として海軍兵学校で運用術の教官をしていて稼ぎがあった郡司が、経済的に彼らの学業を支えたという[6]。露伴は、東京府第一中学校や東京英和学校を経て、学費が官費負担ということに惹かれ、電信技手（技師の下の職階）となるために電信修技学校へ通うこととなった。このころ、露伴は、郡司の家に居候することとなり、同居は一年あまり続いたようだ。電信修技学校の卒業生は、卒業後三年間、命じられた任地で技手としてつとめなければならず、露伴に命じられた任地は、北海道余市にある分局であった。露伴は、小説家として文壇に出る前に、まず、北へ赴いた。

2.「北方志向」のはじまりとしての北海道

1884 年、露伴は、北海道へと向かう。編集者・小林勇が露伴から聞いたこととして記した内容に従えば、氷を売る商売を考えたり、養蚕を試みたりしたらしい[7]。また、柳田泉の聞き書きには、ヌベツの流れを利用して発電する方法を考えたり、カワウソ狩りをしてリューマチになったエピソードなどが語られている[8]。このように新しい土地で、愉快な出来事も多かったのだろうが、露伴は、次第に文学者になりたいという自己の欲求を抑えることが出来なくなり、1887 年、半年残った就業義務を放擲して、突如、東京に帰る。そして、しばしの鬱々とした日々を経たのちに、文壇にデビューする。

北海道体験は、露伴の文芸に少なからぬ影響を与えたように身受けられる。舞台を北海道にとりアイヌ民族を描く小説を、のちに露伴はいくつか発表している。露伴の創作においてもっとも初期（1889 年 7 月）に書いた作品に、「一刹那」（岩波版露伴全集では、第 1 巻に所収）という非常に短い短編三作からなる作品がある。この連作の「三」として掲げられた物語は、アイヌ民族の話として語られ、ひとりの女性をめぐる青年ふたりの愛憎を描いたものだった。また、おなじく、1889 年に発表した「雪粉々」（岩波版露伴全集では、第 7 巻に所収）においては、シャクシャインの蜂起を材にとっているが（露伴が書くのは中盤まで、残りは堀内新泉が書き継いだ）、日本人は概して狡知にたけた悪者として描かれ、アイヌ民族の運命に同情的な筆致である。露伴は、実際に北海道を体験し、アイヌを小説において登場させたもっともはやい近代作家であり、

---

5 ことの真偽は不明だが、広瀬彦太『郡司大尉』鱒書房、1939、寺島柾二『開拓者郡司大尉』、鶴書房、1942、信田秀一『北洋の開拓者郡司大尉』、淡海堂、1942 などには、海軍兵学寮在学当時、同期たちが将来の展望を語り合った際、提督になりたいなどとほかの者が言うのを尻目に、郡司ひとりが北海へ乗り出す情熱を語り異彩を放っていた、とするエピソードが挿入されている。

6 幸田成友「凡人の半生」『幸田成友著作集　第 7 巻』中央公論社、1972、pp.44-53

7 小林勇『蝸牛庵訪問記』岩波、1956、pp.141-144

8 柳田泉『幸田露伴』眞善美社、1947、pp.66-68

「雪粉々」の連載を開始するにあたって「小説界の北海道を開墾」すると述べており[9]、この点に自覚的な作家でもあった。露伴の北海道体験の詳細には不明なことが多いが、若き日の北海道暮しは、露伴の北への志向を育てた側面があるのだろう。むろん、この体験は、官命による義務としてもたらされたもので、露伴自らが特に望んで赴いたわけではなかったにせよ、「北方」を身をもって知ったという意味において、見逃しがたい。明治において北海道体験を持ったもっともはやい作家のひとりが幸田露伴であり、また、はやい段階から北海道を小説の材料とすることに意欲を持った作家であった[10]。

3. 郡司成忠の第一次千島入植梗概

ひとまず、このように、露伴自身が「北の体験」を持つ人であることをおさえておこう。そう確認したうえで、露伴の兄・郡司成忠との関係を見ていきたい。郡司は、先述したように、千島列島への入植を計画し、それを実行した人物であった。その梗概を、麓慎一「明治中期の千島開拓について　―海軍大尉郡司成忠のシャムシュ島移住を中心に―」[11]など　を参考としつつ、第一回の入植を中心に、以下に示す。

1892 年 12 月、「千島開拓の志」の中で、郡司は、千島開拓の意義を、産業振興的な観点、退役軍人の活躍の場という観点、のふたつの観点から述べている。それによれば、まず、退役軍人の有益な活用（就職先）として彼らを北方の遠洋漁業に従事させ、「殖産の道」を開くとともに、シャムシュ島に彼らを移住させることで、外国の密漁船の活動に対し睨みをきかせることがこの開拓の意義であることを強調している。翌 1893 年 1 月、郡司は、海軍にいてはこの事業に専従することがむつかしいと考え、軍人をやめる。同年 2 月の演説「千島拓殖意見」においては、このまま外国の密漁船を放置すれば、それを排除するためにさらなる困難が生じるようになるため、これをいま防がなければならないことを強調し、具体的な開発手順を述べた。このような郡司の訴えは、明治天皇にも届き、恩賜金を授けられるとともに、多くの賛同者からの寄付を集め、郡司は報効義会を組織した。そして、郡司は、シュムシュ島に移住したあかつきにはラッコやオットセイの狩猟によって自給の道をたてることを構想する。だが、最初からそれで利益をあげるのは困難であろうとして、鮭、鱒、鱈を対象にした漁業をひとまずの産業として興すことを考え、それによって現地での食糧供給の安定と、それの売買によって利潤をあげる事業モデルを構想した。

あてにしていた軍艦の払い下げの話が立ち消えになったことで、事業の先行きは危まれたが、無蓋のカッター船でこれを強行するという無謀さでもって、1893 年 3 月、隅田川から約 80 名

---

[9] 塩谷賛『幸田露伴 上』中公文庫、1977、p.89

[10] 木原直彦「解説」『北海道文学全集　第 1 巻』立風書房、1979、pp.463

[11] 麓論文は、『新潟大学　教育人間科学部紀要』10 巻 2 号、2008 に所収。また、前掲広瀬、寺島著に加えて、豊田穣『北洋の開拓者　郡司成忠大尉の挑戦』講談社、1994、夏堀正元『北の墓標　小説郡司大尉』中公文庫、1978、などを参照した。

の一行は千島を目指した。これの直前には、陸軍少佐・福島安正が、ロシアからシベリアにかけての単騎走破を行い、国民の間ではこれを壮挙として賞賛する世論が形成されており、こうした陸軍の功績と対応するものとして、郡司の千島入植は捉えられていた[12]。のち、戦前までの日本においては、少年文学や唱歌のなかで、福島と郡司とふたり並べ、陸・海両極から、対ロシア南下問題に先駆的に壮挙を起こした軍人として、賞賛されることとなった[13]。

一行は、隅田川を出たのち、陸路沿いに北海道を目指し、各地で大歓迎をされたが、まだ北海道にもつかぬうちに、八戸沖で暴風雨にあい、二隻が破船、新聞には郡司の死亡説さえ出た（乗組員 10 名が死亡）。幸いに函館で、報効義会の理念に共鳴する汽船を得て、6 月函館を出発しエトロフ島へ至った。ここに郡司は入植の本部をおき、半数以上の会員をここにおき、先遣隊 18 名で郡司はシャムシュ島を目指したが、海洋事情などでやむなく、シャスコタン島へ向かう。途中、各会員が手分けして、各島の発掘や気象調査、行業調査を行うため別れ、郡司を含む 9 名がシュムシュ島に到達、小屋掛けし、7 名がここで越冬することとなり、シャスコタン島などでも越冬部隊が組織された。

これは、散々な悲劇に終わった。氷に閉ざされた海が夏近くなって解け、各島の会員同士の行き来が再開されると、漁業がうまくいたシャムシュ島では全員生存していたものの、シャスコタン島では全員が死亡していた。日清戦争が勃発するかもしれないという報を知った会員たちは、召集の可能性を考え、のちに南極探検を日本人ではじめて行った白瀬矗ら 6 名を残して、千島を一時引き上げることとなった。この際、残留した白瀬らの生活は特に過酷で 3 名が死亡、これがのちに郡司と白瀬との確執を生むこととなる。第一次の千島入植は、上記のように散々な結果で終わることとなった。

4. スノーの見た郡司

郡司の事業は、外国人の眼からは、どのように眺められていたのだろうか。ここで、千島において実際に海獣狩猟、漁業に従事したイギリス人の残した記録をひとつ参照してみたい。ヘンリー・ジェームス・スノー（1848-没年不明）は、明治初年に来日し、鉄道建設の事業などに従事した技術者であったが、1873 年から 20 年間、千島を中心とする海域で、主にラッコを中心とする狩猟に従事した。スノーは、『千島列島黎明記』において、エトロフ島に日本人が基礎を築いたのは 18 世紀の末以降で、ロシアとの衝突を数回起こしたが、1875 年の南樺太と千島との交換によって日本領となり、その際に、原住民をシコタン島に日本政府が移住させたり、ロシア移住を希望した原住民はロシア領へ移ったりで、無人の海域になった、と千島をめぐる地政学的

---

[12] しかしながら、郡司自身は、遠征それ自体が目的なのではなく、あくまで恒久的入植を目指すものだとして、千島行きが冒険的事業としてのみ捉えられることを必ずしも歓迎してはいなかった。このことは、幸田成友「家兄を憶ふ」前掲広瀬郡司大尉、pp.337-338 に記されている。

[13] たとえば、添田唖蟬坊は、『唖蟬坊流生記』(那古野書房、1941)において、当時、福島を歌った歌が非常に流行しており、郡司を讃えた歌も、福島ほどではないものの流行していたことなどを回想している。

状況を素描する。続けて、郡司の計画に言及し、それは、センセーショナルかつロマンティックな性格のもので、前述の福島の壮挙に海軍側が刺激された結果でもあり国民に熱狂を起こした事業である、と日本の世論の大勢に沿うかのように述べている。そのうえで、郡司隊の行程を次のように描いた。

> 日本の中心からカムチャツカ半島にほど近いシャムシュ島まで約 2100 キロメートルの全行程を、移住者たちは一般の帆船に乗らず、無蓋のボートで、まず日本の海岸沿いに、そのあとは列島の島伝いに進むことになっていた。これは暴挙であって、はじめから失敗する運命にあった。ボートが東京を出発する時、群衆は旗を振り、バンドを奏して一行を熱狂的に見送った。荒れる海、船酔い、不安は一行のほとんどの人たちの熱狂心をすぐ打ち砕いてしまった。ボートのうち何隻かは、東京から約 650 キロメートルの南部（現在の青森県）にまで到達したと私は信じているが、この間、争いや事故、それに何人かの命の喪失は避けられなかった。結局、政府は残存者を船で送ることになった。彼らは小クリール海峡の入口近くのシャシコタン島に移されたが、この荒涼たる海岸の冬は一行にはあまりにも酷しすぎた。翌年の春、政府の船がここを訪れた時、全員が死亡していた。彼らは栄養失調で死亡したものと思われる。シャムシュ島に残った人々のうちの何人かも死んだ。このように寒い気候のところでは、このような悲劇は日本人には珍しいことではない。私は何年か前、樺太で冬籠りしていた多くの日本人が、同じように死んだことを聞いたことがあった。彼らは日夜家に閉じこもってふさぎこみ、全エネルギーを失って、次第に衰弱して別に何ということもなく死んでしまったという。シャムシュ島に留まった郡司は精力的な働き手であった。私は彼が冬季間、部下たちをあれこれと活動し続けさせたと聞かされたが、これが多分、彼らの命を救ったのであろう[14]

上記の記事は、おおむね正確であり、郡司の千島行きの無謀さと、にもかかわらず熱狂した国民のありようを、伝えている。しかし、「分散して各島で越冬した、一行のうちシャスコタン島だけでなく郡司のいたシュムシュ島でも死人が出た」とするのは誤りであって、実際にはシャムシュ島では死者は出ていない。

スノーは、千島の海域で実際に郡司と接触したことがあった。この点に関しては、次のように述べられる。

> しかし彼らの事業はみじめな状態にあった。私は 1893（明治 26）年 6 月、小クリール海峡で郡司に会ったが、その時おびただしい数のタラがこの島の周辺にいたにもかかわらず、彼らはこのタラの漁場さえ知らなかった。郡司は、魚がとれないで、食料に困っていると

[14] H.J.スノー著、馬場脩・大久保義昭訳、『千島列島黎明記』講談社学術文庫、1980 、pp.35-36、原著、H. J. Snow, *In Forbidden Sea*, Edward Arnord, London, 1910

語った。私は、またたく間に一隻分のタラのとれる場所を教えた。それ以来、彼らもよく魚をとるようになり、のちにはタラや他の漁獲が彼らのおもな産業になった。後日、彼らはいっそう発展し、もっと多くの居住者も合流して、一、二隻のスクーナーを入手し狩猟と漁獲用に使用した。これは日露戦争の勃発まで続いた。彼らはカムチャツカの海岸を襲撃した時にこれらの船と数名の部下を失い、郡司を含む数名が捕虜になってしまった。ロシア人がシャムシュ島の居住地を襲ったとも報じられているが、真偽のほどは明らかでない。ともあれ、日本政府は戦争が終わる前に残留者全部を連れもどした[15]

ここで興味深いのは、郡司隊に遭遇した際、彼らが魚のよくとれる海域にいたにもかかわらず、全く魚がとれないで困っていると述べた、というスノーの回想だ。食糧確保をめぐる見通しも郡司一行は甘かったのであろう。そこでスノーは郡司らに魚のとり方を教えたらしい。郡司らの生存には、イギリス人が偶然にせよ貢献していたのだった。同書には、かつてスノーがはじめて船を購入し、千島目指して航海した 1873 年 6 月、宮城県沖でスノーの船は暴風雨に巻き込まれ、難破し、船は大破した際、宮城県庁が非常に廉価でこのイギリス人の船を修理してやったという出来事が述べられてもいる。スノーは、この際の感謝もあって、日本人である郡司に親切に魚の獲り方を教えてやったのかもしれない。

だが、この美談が語るのは、ロシアのみならず、イギリス人も、すでに千島周辺の海域に出没し、水産資源を効率よく獲得する方法を身につけていたという事実であり、本来、そこを自国の漁場にできたはずの日本は、魚群がどこにいるのかという把握さえ、まだ満足に出来ていなかった。

5. 郡司を見送った露伴

では、このような兄の事業を弟・露伴は、どのように眺めていたのだろうか。かなり後年の回想だが、1939 年、郡司の事業を顕彰することに熱心だった海軍軍人・広瀬彦太が先述の『郡司大尉』を執筆した際、求められて跋文を寄せた露伴は、そこで、自分はすでに老体で書くべきなにものもないが、兄の千島入植の背景は自分の知っている限り、次のようなものであるとしてこう述べた。

其頃の千島北部というものは吾邦人には全然耳目に遠く、意識に上っていない位のものであった（……）（中略部分引用者補・1890 年に明治天皇の命をうけ北方探査した片岡侍従の調査もエトロフ島までであった）遺棄せられた北千島は、当時南下の意の甚だ急であった北隣の露西亜とは一水を隔つるのみの地であったから、国家の何等の施為も無くて其儘

[15] 前掲『千島列島黎明記』、pp.36-37

に置かるるといふことは、如何いう事態を生ずる原因とならぬとも限らぬことであった[16]

そう述べたうえで、ロシアの南下警戒という大義以上に火急の問題が千島にはあったのだ、とする。それは、ラッコやオットセイといった海獣の密猟をめぐる問題であった。日本海軍の警戒が充分でなく、野放しのままの千島列島は、その当時、密漁者の拠点となっていたという状況を述べ（スノーはまさにそうした密漁者の一人だった）、また、当時の海軍は創生期だったが、自らに課せられた海洋国防の使命を純粋に信じる士官兵卒が多く、退役してなお、その使命感を持続させているものが置かった、と回想する。続いて、

当時兄は海軍に服務し、自分は文学に従事しはじめて居り、相互に方面違いのものとなっていたから、日夕往来して晤言するようには有り得なかった。しかし兄が北海の事を口にするのは敷々耳にしていた[17]

と述べ、北の海をめぐる兄の思考を、頻繁ではないにせよ、耳にしていたことが述べられる。そんなある日、兄は露伴に、文書の添削を依頼する。海軍が持つ軍艦のうち、老朽艦の部類に属する「震天」を自分たちの企みである千島入植へ利用するため、政府に払い下げを願う内容であったと言う。露伴は、自分の筆のせいで、その払い下げがうまくいかなくては大変だと考え断ろうとするが、兄は、すでに半ば了承が政府との間に出来ているように言うため、これを引き受けた。そして、この引下げをあてにして千島探検の準備は進められていた。しかし、どんな事情であったかはもはや忘れたが、この船の払い下げは政府に許可されなかった、と露伴は言う。先述のように、この払い下げ不可は事実であった。だが、既に準備は着々と進めてしまっている。諦めたものも多かっただろうが、この為にかえって無理を承知で突破しようと激動的になったものもいただろう、と露伴は述べる。その結果、郡司の千島行は、無蓋のカッター船数隻で行われることとなった。

自分は呆れた。世人は喝采した（……）自分は哀れなるカッター、それすら人数に応じただけの数に足らず、カッターよりも猶哀れなヤンノ船を交えた一隊が、皇城遥拝を済ませて、横須賀へ行った時、兄の艇に便乗した。送って呉れた人々の声々に勇ましいのに、其同情を喜びはしたが、悲しかった。横須賀へ入った時、軍艦が見えた。其軍艦の人々が橋桁に真黒に鈴なりになって見えた。それは登桁礼（とうこうれい）といふ大儀礼であると聞いて知った。自分は俯伏した。ポロポロと堕つる涙は止めど無かった[18]

このような無謀さに対して、肉親である露伴は、世人の喝采をそのまま受け取ることはできず、

---

16 幸田露伴「跋」前掲広瀬郡司大尉、p.344、なお、岩波露伴全集では第 30 巻に収録
17 前掲広瀬「郡司大尉露伴跋文」、pp.346-347
18 前掲広瀬「郡司大尉露伴跋文」、p.349

「呆れて」しまったようだ。露伴は、カッターしか船の得られなかったことに不安を感じてか「哀れなるカッター」といい、隅田川から郡司艇に見送りのため、同船したときのことを回想している。横須賀では、軍艦が最上の敬意を払って、みすぼらしいこの船を見送ってくれた。露伴は、伏せて、涙をおさえることができなかった。それは、最上の礼を兄にとってくれることの一応の感謝の涙でもある。だが、このように敬意を払われつつも屋根すらない船しか得られずに千島へ向かうという兄の不遇さへの涙、という意味がやはり勝っていただろう。先述のスノーが描いた郡司の出発の場面は、こうした露伴の回想とも符号しており、人々の喝采の中で、露伴は涙を流していた。

6. 弟たちのペンによる支援　―『大氷海』翻訳の周辺―

では、こうして兄を送った直後の露伴の文筆活動には、その直接的な影響は、どのように認められるだろうか。

シャスコタン島へ別れて越冬した仲間が全滅したという悲劇を、シャムシュ島で越冬した郡司たちが知るところとなった数か月後、東京の露伴は、自分を訳者としてある翻訳書を出した。その本とは、「ヘスチングス・マルクハム著、幸田露伴譯」として 1893（明治 26）年 9 月、博文館「世界文庫　第七編」として刊行された『大氷海』である。露伴の英語学習は、東京英和学校で一年ないし一年半程度行ったのみだが、相応の語学力は有していたようで、露伴の蔵書目録には数は少ないものの、英語文献も散見する。この翻訳は露伴の弟・幸田成友が下訳をしたものを露伴が校閲して世に出たとされている。露伴単独による仕事ではないため、全集には未収録である。この本の原著は、以下だ[19]。

Rear-Admiral Albert Hastings Markham, *The Great Frozen Sea, A Personal Narrative of the Voyage of the "Alert" during the Arctic Expedition of 1875-6* , London, Daldy Isbister & Co, LTD, 1878

この書は、アレルト、ディスカバリー二隻が 1875 年から翌年にかけて行った北洋航路開拓の航海を、アレルト乗り組みのイギリス海軍士官、ヘスティングス・マーカムが記録したものである。露伴は、翻訳にあたっての序において、次のように述べている。

---

[19] 本翻訳の原著をめぐって、かつて、潟沼誠二「幸田露伴の『大氷海』」（『語学文学』36 巻、北海道教育大学、1998）は、マーカムの著作に本翻訳に合致するものは発見できず、別のマーカムの著作をもとに内容を取捨選択した翻訳ではないか、としていたが、その後、国立国会図書館のアーカイブ、近代デジタルライブラリーは同書を同定しており、また、橋本順光も、「カーゴ・カルト幻想　―飛行機崇拝の物語とその伝播―」（『天空のミステリー』青弓社、2012）の註 34 において、これを明記し、この翻訳は郡司の事業に関係があるものだろうとしたうえで、ほぼ正確な全訳であることを指摘している。今日では『大氷海』が *The Great Frozen Sea* を原著とする翻訳であることに疑いはなく、本論では、この翻訳の時事的意義をより明確にしたい。

ノルデンスキヨルドの北洋航海は其艦ヴェガの吾が邦に来りしため今猶我が邦人間に嘖々として稱せらるるところなれども、其困難を排し辛酸を経たるに至つては此書の記するところの北征決して彼に譲らざるのみならず大に彼に凌駕するものあり、訳者須らく刮目一番、英国軍人の如何に寒威指を堕し堅氷髭に在るの惨天地に立って思惟言動せしかを看取すべし、

死生の二字は僅に小人を煎るに堪ふるの水火のみ、大丈夫事を為す、ただ事あるを見て他あるを見ず、又何の遑あってか特に死を決するを須ひん（……）吾兄微志を賚して千島極北無人の地に在り、糧食は乏きなり、船舶は足らざるなり、器具は難に遭ひて半を亡へるなり、屋舎は未だ成らざるなり、而して此辺載するが如く今や天は黒からんとするなり、海は凍らんとするなり、雁魚は既に通ずるに由無きなり。訳成って筆を投じ、瞑目時の移るを忘る[20]

ノルデンショルドは、いわゆる北東航路を開拓したフィンランド人探検家で、1879 年、日本にも寄港した。その記録はノルデンショルド自身の航海記録『ヴェガ号航海誌』に詳しいが、日本では国を挙げて大歓迎された[21]。露伴は、よく人の知るノルデンショルドの航海を引き合いに出しつつ、マーカム『大氷海』もこれに劣るものではないと賞賛する。また、「如何に寒威指を堕し堅氷髭に在るの惨天地」とマーカムの旅程の過酷さを強調する。そして、自分の兄・郡司成忠がいま千島にあることを、ノルデンショルドやマーカムになぞらえながら述べようとする。なにもかもが不足の状況で、自分の兄は、この訳書に描かれる航海に比肩するような事業を為しつつあるはずだ、とその姿を思い浮かべている。この訳書が、成友の下訳によるということは、成友が以下のように回想している。当時、一高生だった幸田成友は、露伴宅に居候していた。

それから帝國圖書館の蔵本によって全譯した「グレート・フローズン・シー」、この方は小説でないから一向面白くはないが、『大氷海』と題し、単行本として博文館から出した。両書とも譯者として兄の名が掲げてあるのは、羊頭狗肉の謗を免れまいが、自分の手許に保存せられている『大氷海』の原稿の一部が、兄の自筆であることにより、兄が全責任を負うてくれた証拠とする[22]

上記のように、露伴と、同居する成友の共同作業として出たのが、この翻訳であった。「帝國図書館」の蔵書によって訳した、と成友は明記しているので、筆者は、帝国図書館の蔵書を引き継

---

[20] 幸田露伴「大氷海に題す」『露伴全集　第 32 巻』、岩波、pp.7-8

[21] A・E・ノルデンショルド著、小川たかし訳『ヴェガ号航海誌　下』、フジ出版社、1988、pp.293-379、同書は、英訳本、*The Voyage of the Vega around Asia and Europe, with s Historical Review of Previous Journeys along the North Coast of the Old World*, translated by Alexander Leslie, Macmillon & Co, 1881 からの邦訳。

[22] 前掲幸田成友「凡人の半生」、p.69

いだ国立国会図書館の架蔵書が成友の用いた原本ではないかと考え、これを取り寄せてみた。が、現在の国立国会図書館架蔵本は、旧・東京師範学校附属東京教育博物館の印が押されており、帝国図書館から引き継いだものではないようで、おそらく成友が直接参照したものではない。ここで成友は「小説でないから一向面白くはない」と回想している。面白くないものを、なぜその時は翻訳し出版したのか。そこにはなにか時事的な理由があると考えるのが自然で、これは、いわばふたりの弟たちによる、兄の事業への間接的な支援のような翻訳だったのだろう。露伴も単に名を貸したのではなく、成友の下訳に手を入れたらしい。

この訳書の内容を、いままで見てきたような、船さえ満足にないような、郡司の千島入植の有様を頭に入れながら、ごく一部だけ、確認しておこう。この本は、冒頭、アレルト、ディスカバリーの二船が北氷洋へ向かうために施された艤装を述べる。

> 荘厳ならざれど北氷探検の為に発遣せらるる者のことなれば小形なれども反抗力に富み如何なる氷山に衝突すべくとも舷端(げんたん)を破損などすべくも見えず[23]

たとえば、上記のように、装備の整った船のありようが述べられる。原文の対応箇所は以下である。

> Although of insignificant size, in comparison with the huge ironclad monsters by which they were surrounded, yet a close observer would readily detect signs of great strength in these two businesslike looking vessels. And very necessary was it that they should possess strength and powers of resistance of no ordinary kind, for they were destined to grapple and fight with the heavy and unyielding ice floes of the Polar Ocean.[24]

やや圧縮されているが、意を損なってはいない。これに続いて、見た目はあまりよくないが、いままで北西航路探索のために多くの船を派遣してきたイギリスの教訓を生かして、糧食から艤装に至るまでの工夫が行われたことが描写される。事実、谷田博之『極北の迷宮』[25]などに詳しいが、これ以前から、北極点を目指す北西航路開拓の派遣を行ってきたイギリスは、このマーカムの著書が書かれる 1878 年までに、多くの失敗の事例から学び、装備を強化していた。つまり、すでにこの時期のイギリスの北極探検隊には先行者たちの経験から学び、あらかじめ必要な装備を整える余裕があった。それのみではない。たとえば、露伴・成友訳『大氷海』において、「第十五　冬季の職業と娯楽」「第十六　北極の基督降臨祭」「第十七　楽しき新年」と訳されている各章には、この探検中、マーカムたちが、トラファルガー海戦記念日、クリスマス、元旦などを、酒や肉で祝い、興じるさままで描写されている。郡司一行には、そのような余裕はなかった。前

---

[23] ヘスチングス・マルクハム著、幸田露伴譯『世界文庫　第七編　大氷海』博文館、1893、p.3
[24] 本文前掲 *The Great Frozen Sea*, pp.1-2
[25] 名古屋大学出版会、2000

述のように、貧弱なカッターしか得られなかった郡司たちは、千島につかぬうちに、八戸沖で、二隻が転覆、10 名が死亡している。このことを、先発隊として函館で郡司たちの主力隊を待っていた白瀬矗は、次のように後年書き残している。

> 笹葉の如き端艇（ボート）で何んとして山のような大浪が凌げよう。転覆したとて咎むるは無理だ[26]

本論５においてすでに見たように露伴が「哀れなるカッター」と呼び、ここで隊員・白瀬が「笹葉の如き端艇」と呼ぶ、郡司たちに与えられた船の回想と、露伴と成友が兄の出発直後に出したマーカム訳『大氷海』の冒頭にある、「小型なれども反抗力に富」んでいてどのような氷山にぶつかっても壊れそうにない英国艦の描写とは、北の海をめぐる探検の光と影のように呼応しているかに見えてくる。こうしたなにげない部分部分を訳しつつ、弟たちはなにを感じていただろう。確かに、『大氷海』序文において露伴は、ノルデンショルド、マーカム、郡司成忠を、人間をいまだ厳しく拒む氷の海へ格闘する等価な存在として、並列的に提示している。だが、ノルデンショルドともマーカムとも比べようがないほどに、郡司の一行の装備は貧弱であり、いままさに悲惨な結果を迎えつつあることは明確である。そのようなことを露伴はおそらくは理解しながら、あえて並列し、「瞑目」していたのではなかっただろうか。むろん、露伴は、序文で、マーカムの航海の過酷さを強調してはいるが、「瞑目」の意味するところを考えるとき、このような差異のほうが目につく。

7. 海洋思想の欠如をめぐる露伴の苛立ちと希望　―少年文学「北氷洋」―

続けて幸田露伴は、上記「マルクハム」訳を刊行した二か月後、1893 年 11 月から 12 月にかけて『小國民』に、少年文学「北氷洋」を載せた。明治 20 年代中期から後期にかけては、主として『小國民』などに依って、啓蒙的な少年文学を露伴がもっとも多く記した時期である。「北氷洋」は創作ではなく、海に囲まれた日本はもっと海洋に対する思想を持つべきであり、君たちの活躍の舞台は陸に限定されない、という内容を、和洋の事例をひきつつ、述べたものだ。その際に、露伴は、世人は陸上の事には過剰な注意を諸君は払うのに水上にはそうではない、として、対比的に書き出していく。

> 四囲皆海の国の民にてありながら、嘆かわしきほど現時の吾が国民は水上の思想（かんがえ）に乏しく、随って我が邦の今の光景（ありさま）を反映し出すところの新聞紙も亦、陸上の事に関しては些末猥雑のことにまで精細なる観察をなし敏捷なる報告をなせど、水上の事に関しては、注意を欠き勝ちなれば、吾が敬愛するところの小国民もまた恐らくは、文章美術等の事に意を注くる比例（わりあい）には、水上の事に意を注くること少なからん。又多年陸上に大功を立てんと考ふる

[26] 白瀬矗『南極探検』博文館、1913、p.16

人の比例には、水上に大功を立てんと考ふる人少からん（……）吾が大日本国民の水上の思想、何日までも今日の如く幼稚にては、嘆くべきことなり、済まざることなり、怪しからぬことなり[27]

露伴がここで対比してみせる「水上に大功」を立てようとする人と、「陸上に大功」を立てようとする人とは、郡司と福島との対比としても解釈できる。既に、註 13 においても少し述べたが、当時、郡司の千島入植と福島のシベリア単騎行は、水陸双方の壮挙として世論を熱狂させつつも、福島の功績のほうがわかりやすく、より国民から人気があった。現在の「水上の思想」が「幼稚」であると非難し、それを、「嘆くべきこと」、「済まざること」「怪しからぬこと」と繰り返して、強調する。この箇所に続けて、海に囲まれた島国でありながら、嘆かわしいほどそうした思想に乏しいのがいまの日本であるとし、海上をきみたち少年の直接の活躍の場としないまでも、せめて海洋をめぐる思考はさらに深めるべきである、とする。そして、少年たちの愛国心をくすぐりながら、それを鼓舞していく。

日本は島国なり、是(かく)の如くならずんば何の日にか膨張し何の日か発育して、西欧諸国と雄を争い力を闘わすに至らん（……）日出づるところの天子、徳は朝旭(あさひ)の如くなるに、吾が国民たるもの、如何でか蒼溟(そうめい)万々里に人をして日章旗を仰がしめずして叶うべき[28]

極めて直接的に、日本が「水上の思想」に目覚め、このまま勢力を拡大できるのであれば、「西欧諸国と雄を争い力を闘わすに至」るだろう、とまで述べている。そして、海の彼方に日章旗をたてよう、とまで言う。そして、ここで、郡司の千島入植へ言及する。そこでは、同じく島国であるイギリスに言及する。

驚くにも足らず怪むにも足らざる郡司大尉の短艇遠征にさへ、空しく吃驚(きつきょう)し、空しく怪訝(かいが)し、空しく批難し、空しく疑懼(ぎく)するが如き、豆ほどの膽の男のみ多かりしならば、英国は決して今日の英国までには膨張し発育せざりしならん[29]

郡司の遠征ごときで驚いているようではイギリスのように海上に拡大していくことはできない、このように露伴が強く苛立ちながら言うとき、当然、二か月前に成友と共同で出した『大氷海』の内容を念頭に置きながら言及している（事実『大氷海』の原著者が乗り込んでいた「アレルト艦」の名も後半に出てくる[30]）。続けて、日本も、むかしはそうではなかった、として、水上の

---

27 『露伴全集　第 10 巻』、岩波、p.309
28 前掲露伴全集 10、p.310
29 前掲露伴全集 10、p.310
30 前掲橋本順光もまた、『大氷海』「北氷洋」が郡司の千島入植と同年であり、これに感化されてのことだろうか、としたうえで、両著作のつながりに注目していたが、本論ではさらに、『大氷海』「北氷洋」両作

思想を再び取り戻すべきだ、とする。そのうえで、西洋列強の海洋探検家たちに言及する。その言及は、『大氷海』の原著、*The Great Frozen Sea* に依拠する部分もあるが、そうでないと思われる箇所もかなり多く、複数の典拠から書いているとおぼしい。さて、こう話題を進めたうえで、露伴は西洋の探検家に言及していくのだが、ここから、北極探検あるいは北西航路の発達史を露伴は書いていく。それを、いわばさきにひいた言葉にあった「水上に大功」をたてつつある人々の格闘の歴史として書いている。まず言及されるのは、ノルウェーのナンセンである。

> 今の吾が国民は海事に関する注意さへ多くは興へざる間に、欧州諸国民は敷立(しばしば)って海上に偉勲を為したる者あり、現に今や氷海暗黒の北極に向って一大偉勲を立てんとする好漢すらあり[31]

と、上記のように導入して、当時話題として新しかったナンセンを紹介していく。「氷海暗黒」の「北極」と格闘しようとする「好漢」としてナンセンに言及し、さらにこの文章に続けて「好男児」とも書き、ナンセンの挑戦を賞賛する。そして、すこしあとの部分では、イギリスのフランクリンに話題を及ばせ、次のように書く。

> 試みに地球全図を繙きて北部を一瞥せよ。氷雪の地の記載せらるる者も少からねど、真の北極を中央点として直径九百英里(マイル)の圏中に人間の足跡の未だ到らざることは明らかなるべきが、是は恰も社会一般が、欧州より印度に達すべき北西航路を発見せんとて氷海に赴きたる往時の探検者、又は踪跡(そうせき)を失ひたるフランクリンの遠征隊捜索に行きし人々に同情を表し、却って地球の地図を完全にせんとの大目的を以て艱難を冒せるには同感を有せざると相同じといふべし[32]

フランクリン探検隊の悲劇によって、かえって北極探検の道を志す人々が増え、北西航路の開拓が加速したさまを上記のように露伴は描いた。これに続けて、ランゲル（ロシア）、ノルデンショルド（フィンランド）、ケーン（アメリカ）など、同じように北海を志した人々の業績が紹介されていく。前人未到の氷で閉ざされた海と格闘する人々の発展史をそのように描いてみせることで、露伴は、郡司の事業を海洋開発の世界史的見取り図の中に置こうと意図したのかもしれない。千島列島は、たしかに、北極点とは異なり、人類未踏の地ではない。郡司の入植は、外国船への警戒意識と水産資源確保が主な理由だった。また、さきに本論註 12 でも述べたように、郡司自身もこの事業を冒険的側面からのみ捉えられることには反発していた。だが、そうであったにせよ、当時の人々の意識を大きく海洋へと向けさせる効果があっただろう。郡司の事業は、結果として、成功したとも言い難い。けれど、フランクリン隊の犠牲が北極点到達の歴史を大きく

の連続性を考察する。

[31] 前掲露伴全集 10、p.311

[32] 前掲露伴全集 10、p.312

推進する結果になったのと同様に、郡司の事業とそこで払われつつある犠牲は、後続の挑戦者たちへと受け継がれなくてはならないものとして、露伴には捉えられていた。「北氷洋」にある露伴の苛立ちは、郡司の事業をめぐる世論の毀誉褒貶とも深い関わりがあると思われる。前述の白瀬は、八戸沖での難破のあと、世論からすぐさま冷淡な反応が寄せられたことを回想している。

> けれど悲報一度国民の耳朶(じだ)に入るや、国民は眉を顰めた。熱するに早い国民は醒めるにも速い。「未だ北海道にゆくかゆかぬ裡(うち)沈没するとは何事である。迚(とて)も千島までは覚束ない」と国民は前途を悲観し、杞憂し、果ては大尉の挙を軽挙と貶すものさへ生じた[33]

このような同時代的背景から考えていくと、なぜ少年たちの愛国心を刺激しながら、あのように激しい苛立ちを露伴が表明していたのかが理解されるだろう。いったん熱狂した世論は、事業開始まもなく難破事故が起きると、「軽挙」とこれを批判する方向に傾いていた。事実、そう批判されても仕方のない部分もあった。だが、だれも試みなかった事業が失敗するのはいわば当然のことなのであって、むしろそこに意志を継ぐものが出現すべきだと露伴は「北氷洋」で暗に訴えていた。本論で幾度か言及した白瀬矗は、北極ではなく南極へ向かうが、はるか後年、日本の氷洋探検における大きな前進を担った人物として今日まで名が残っている。

こうして、世界の氷の海を冒険した、あるいは、冒険を行おうとしている西洋のさまざまな人物と郡司を並列して少年たちに語るとき、郡司が本来目指した入植の意義を、結果としていくらか露伴は歪めて伝えてしまっていたかもしれない。先述のように、郡司自身は、この事業を「冒険的」と見なして世論がこれに熱狂することは、自分の本意ではないとしていた。露伴もそのことは知らなかったわけではないだろう。だが、熱狂と嘲笑の間で兄の事業がさまざまに世間で云々されるさなか、露伴は、この短い文章において、熱狂の側の世論を焚きつけようとしたように見える。

8.「萎縮的」ではない海洋文学の創造へ向けて

このように、露伴における北の海への志向は、自身の北海道体験や、実兄・郡司の千島入植などの刺激に呼応して、露伴のなかで、はやい段階から形成されたものであっただろう。特に重視すべきは、郡司との関係で、露伴は、千島入植事業に完全に賛成だったわけではないが、少なくとも、第一回の千島入植の直後、これをペンで支援するかのような文筆活動を行っていた。露伴と郡司との関係を再考してみることによって、露伴の海洋の捉え方の一側面が明らかになるように思われる。それは、郡司の千島入植の直後に出た、翻訳『大氷海』、少年文学「北氷洋」などに、極めて直接的なかたちで表明されている。『大氷海』において、ヘスティングス・マーカムの北洋探検成功が、フランクリン以来の犠牲とその教訓から生まれたものであることを世論に暗

[33] 前掲白瀬『南極探検』、p.16

に示した露伴は、続く「北氷洋」においては世人の無理解への強い苛立ちの中に、その問題をあえて「冒険的」な側面を強調することで訴えようとしていた。

このような露伴の海洋観は、さらに異なったかたちで、別の随筆からも窺い知ることができ、また、それは、『大氷海』「北氷洋」などとも響きあう内容になっている。それは、1900 年 7 月、雑誌『海』の創刊号に寄せた「海と日本文学と」と題する随筆である。「我邦は四囲皆海にして」と書き出される書き出しは、「北氷洋」の書き出しともよく似ているが、露伴は、ここでタイトルにもあるように、「海」という問題を文学の領域にひきつけて考えようとしている。まず、日本においては海洋文学が不思議なことに欠如している、と露伴は見る。和歌を例に出しつつ、次のように言う。

> 此に由りて考ふるに（引用者補・日本が海に囲まれ海岸に沿って都市が発達しているという事実から考えるに、の意）、我が邦の文学もまたおのづから海との間に少なからざる関係を有すべき理なり（……）然るに事実はいたく之に反せり（……）たまたまこれ無きにあらずと雖も、多くは海を怖れ海を厭へるが如き思想の傾きを有するものにして、海中に立てる国の民の歌としては相応はしからぬものとや云わん[34]

海をめぐる日本の文学的伝統は、むろん無いわけではないが、これほど海に囲まれた島国であるのだからもう少しそれが活発であってもよさそうなものだ、との意見を露伴は表明している。しかもそこで表現された海は、どのような海であったか。海がもたらす恐怖の側面を日本文学はことさらに強調してきたと露伴は述べ、そこに飽き足りないものを感じている。詩歌のみならず、小説（ここで露伴が言う「小説」は「近代小説」の意味ではない）においても同様だ、と露伴は筆を進める。

> 小説は源氏物語宇津保物語のむかしより、海とさへ云へば怖るべきもののよう描けるが多し。風に遇ひて船の破るること、または思わぬかたに吹き流さるることなどは、好みて古来の小説家の描けることなるが、其物語は大抵皆机の上にて作者が海に対する自己の恐怖心よりに捻り出したる曖昧無実のものたるに過ぎず、一も真実らしき状態を描きて海上の光景を読者に感じ知らしむるもの無し（……）古来の小説少なからずと雖、海員の生活、船の上の旅客の真情等を書き現はししものの如きは、幾干かあらんや。予は実に或一章にすら海に関する記事のやや屬目を値すべきものを含める小説の名を指し示す能はざるを悲しまざることを得ず[35]

忌むべきもの、恐怖の対象として言及されてきた海の描写の多くは、古来の作者たちが机の前で

---

[34] 幸田露伴「海と日本文学と」『露伴全集　第 24 巻』岩波、p.360
[35] 前掲露伴「海と日本文学と」、p.361

想像したに過ぎない真実味の乏しいもので、そうしたものを読んでも、情景が目に浮かぶことはないだろう、と露伴は言う。そして、「海員の生活」、「船の上の旅客の真情」などを描き得た日本文学がどれほどあるだろうか、と問い、たとえ一部でもそうした描写のある小説を自分は挙げることができない、とする。

このように露伴が、日本における海洋文学の伝統の欠如を語るとき、他方で、海洋文学の盛んな国家としてどこを念頭に置きながら言及しているのかは、わからない。だが、同じように露伴の語彙に従えば「四囲皆海」の島国であり、かつて自身が弟と協力しながら、その航海の実録を訳したマーカムの属するイギリスが、このとき対照として仮想されていたのかもしれない。事実、文学史的事実として、海洋文学が特に発達したのは、イギリスとアメリカにおいてであった。無論、マーカムの *The Great Frozen Sea* は、狭義の、創作という意味での文学作品ではない。全体に、露伴の触れた西洋の著作は、柳田泉の「露伴先生蔵書瞥見記」などを見ると、ほとんどがプラクティカルな書物である[36]。だが、露伴は、実録が持つ生々しい真実味というものを好んだふしがあった。たとえば、はるか後年に露伴が著した小説「幻談」（1938）の前半は、ウィンパー『アルプス登攀記』からの語り直しだが、この本を露伴に贈った小林勇は、同書をめぐって露伴が「うまい文章でもなんでもないが、実際に自分で体験したこと、自分で見たことを書くということはああいう工合になにか人に迫るものが出る」と述べていたことを記している[37]。本随筆「海と日本文学と」においても、日本文学の海洋描写への不満は、「海員の生活」、「船の上の旅客の真情」がリアリティを持って迫真的に描かれていない、という点にあった。「海と日本文学と」には、マーカムの航海実録の名は挙げられていない。が、露伴がそのように言う時、まさに「海員の生活」が実録として詳しく述べられている、かつての同書の翻訳の影響を排除して考えるほうが難しい。

露伴は、日本の海洋の描き方に不満を表明する一方で、万葉集の海をめぐる詩歌などには一定の評価を与えており、また、特に徳川期の鎖国政策などに言及して、日本が海をめぐる文学を十分に発達させ得なかった歴史的背景も考慮すべきだろう、という冷静さも見せる。ただし、そこでも強調するのは、昔からずっと日本人が海を恐怖の対象としてのみ考えていたわけではない、万葉集の時代は違う、ということであって、全体の論旨は、だからこそ今後、日本は「萎縮的」ではない海洋文学を創造せねばならない、というところにある。次のようにこの随筆を露伴は結んでいる。

> 海中に国を成せる我邦人に呑海の気象無くんば、如何で世界に勇を稱するを得ん（……）今や我邦は山間の狭き平地に安きを愉みしが如き昔時の愚をば復びせず、膽勇ある我邦人は島内にのみ安居するに堪へず、海に親しむことは日に月に多く成りゆけり。海国の所産

---

36 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」『日本文学研究資料叢書　幸田露伴・樋口一葉』有精堂、1982、pp.102-122、初出・『文学』岩波、1966・3ならびに4号

37 前掲小林「蝸牛庵訪問記」、p.106

たるに相応する文学は蓋し今日以後に成らん[38]

すでに、これを書いた時点で露伴は、長編『いさなとり』（1891）を完成させている。そして、中絶する長編『空うつ浪』（1903）を、この後、書くこととなる。いずれも、上記のような露伴の海洋文学への志向が反映された作品であり、またその創作自体によって海洋文学への意欲をさらに深めていく契機となったであろう作品群だった。

おわりに

実兄・郡司成忠と幸田露伴の関係を中心に、「露伴と海」という問題系を考察してきた。露伴は自身が北海道に住んだ体験を持つ作家であり、身をもって北方を知っていた。兄の千島入植事業に際しては、兄の思惑と微妙にすれ違いながらも、折々にこれを支援し、文学という自分の領域にひきつけて、これを消化しようという意志を持つ作家だった。こうした露伴の意志が、どのように個々の作品の中にこだまするのかを探ることを、今後の課題としたい。

[38] 前掲露伴「海と日本文学と」、p.365